東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

シアトル日本語補習学校の特色と課題

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-04-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中野,龍文 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173772

シアトル日本語補習学校の特色と課題

前シアトル日本語補習学校　校長
兵庫県丹波篠山市立城南小学校　校長　中　野　龍　文

キーワード：補習授業校、現地採用教員、保護者からの苦情、シアトル日本語補習学校、進級・進学・卒業の制度、アンカレッジ補習校巡回指導、特別支援

１．補習学校の特色

(1) 補習授業校とは？

一般的には、各地の在留邦人等によって設立され、そこに組織される学校運営委員会によって運営されている。在留邦人がその子どもの国語等の学力維持のために設立している施設で、国語、算数（数学）、理科及び社会等の教科につき、教育水準の維持を図るための補完的教育施設となっているものもある。

補習授業校（以下補習校）は基本的に「英語圏」に多く設立されている。英語の世界的な汎用性に鑑み、せっかく英語圏にいるのだから滞在中に英語を習得させたい。だから、平日は現地の公立学校等（現地校）に通い、且つ帰国時に日本の学校にスムーズに順応するために土曜日（金曜日の夜間や日曜日のところもある）は補習校へという流れになっている。米国で日本人学校が殆どないのはこのためである。シアトルも同じで、日本政府は、その規模（在籍生徒数）によって日本から教員を派遣している（校長・教頭職のみ派遣）。

(2) シアトル日本語補習学校とは？

シアトル日本語補習学校は、昭和45（1970）年に設立された私立の学校（日本政府から正式に認められた学校ではなかった）である。ちょうどスターバックス１号店がシアトルに誕生した年と同じ年である。運営母体はシアトル日本商工会（春秋会）で、その教育部会理事が中心となって学校運営委員会を組織している。運営委員は１月～12月の任期で、８月を除く毎月最終木曜日に定例会が開かれている。

運営にかかる費用は、主に①入学金および授業料、②商工会からの補助金、③日本政府からの補助金（講師謝金、校舎借料等）でまかなわれている。

授業を行う教員は全て現地採用である。教員は日本の教員免許、専門教科に関係なく教壇に立つことになり、したがって、その教員の授業力や教員としての資質向上のための研修が、派遣教員の重要な任務の１つとなる。平成30（2018）年９月現在、幼稚園から高校まで約600名が在籍している。

子どもたちが通うのは基本的に土曜日だけなので自前の校舎はなく、本校は普段は高校として使われている校舎を借用している。図書室、倉庫兼コピー室だけは年間を通して借用している。図書室には約13,000冊の蔵書があり、随時新刊が入ってくるので、幼児から大人まで利用させて頂き重宝されている。子どもたちは、登校時間から10分間、朝の読書に取り組んでいる。

(3) 巡回指導について（アンカレッジ補習校へ巡回指導）

シアトル日本語補習学校は、派遣教員のいない小さな補習校（アンカレッジ補習校等）への巡回指導を依頼された場合は実施することがある。平成28年・29年と連続して実施した。

（アンカレッジ補習校への巡回指導を終えての感想）

今回の巡回指導を終えて、派遣教員がいなくても、日々、子どもたちの日本語教育に邁進されている理事会の方々や経験がない中で一生懸命に授業されている先生方、そして、保護者の熱心な協力体制がとても強く印象に残った。また、アンカレッジ日本語補習校に学ぶ子どもたちの前向きな姿勢や頑張りを肌で感じることができた。

補習校の形態は多種多様であっても願いや目指すところは同じであることも改めて実感した。それだけに日本での教員経験を持ち、補習校運営の経験を併せ持つ派遣教員の存在は非常に大きく、多方面に活かされていくべ

きだと認識した。

私自身も本校では考えることのない、複式学級の指導やアットホームな学校づくり等学ぶことが多くあり、実りの多い巡回指導になった。今後は、シアトル校のみならず補習校全体のステップアップを視野に入れ、これからの業務に励みたいと思う。

最後に、巡回指導の受け入れについても理事会を中心に綿密なスケジュール表を作り、1分1秒も無駄にしない心意気を感じた。子どもたちは明るく、好意的に迎えてくれ、質問もしっかりした口調でたくさんしてくれた。アンカレッジ校で受け入れ準備がしっかりと進められていたことに深く感謝している。

2．シアトル日本語補習学校の課題

(1) 教員の指導及び確保について

現在は、約60名の教員を土曜日のみの出勤で雇っている。平日は企業等で勤務している教員が多く、補習校に専念している教員は少ない。また、現地での生活年数が長く、アメリカナイズされているため教員指導や研修が大変困難である。さらに高齢化が進み教員の平均年齢は55歳を超えている。

教員の募集がとても困難で人材不足が大きな課題となっている。さらに、ほとんどの教員採用希望者は教職経験がないため基本的な研修が必要である。

平成29年度からは、育成教員制度を設けて育成システムの構築（正規教員の授業参観やチームティーチング及び欠席した教員の代行授業等を実施し、管理職が指導助言を行う）に、取り組んでいる。

また、労働ビザのない保護者に対して、ビザ取得の費用等を運営委員会が負担することによって、優秀な教員の確保と教員の資質向上に取り組んでいる。

(2) 教育指導のあり方について　（進級・進学関係）

本校では、入学時・編入時に学年相当の学力（日本語力）を身に付けているか編入テストを実施し、合格できないと入学を許可していない。そのため、日本からの編入者は、ほぼ合格するが北米他州の補習校からの編入生は90％以上の確率で不合格となる。さらに、幼稚園部では、永住者の子女受験が多くなり、約1割の不合格を出している。また、進級・進学についても厳しいルールを設けているため、保護者からの苦情が多く、対応として毎年、全保護者から本校の運営方針・及び学校のあり方に賛同することや進級進学・卒園卒業の認定について遵守する誓約書の提出を義務づけている。しかしながら、保護者からの苦情は絶えない。

本校の学力は、日本人学校にも劣らない高いレベルを維持しているが、今後は、このレベルを維持しながらもアメリカ生まれの日本人子女の入学・編入・進学の門戸を広げる必要性を感じている。

(3) 保護者からの苦情（高等部進学について）

本校もアメリカ生まれ、アメリカ育ちの子女が6割を超え、保護者のニーズが大きく変わっている。このような中、日本に帰国することを前提として、高いレベルを維持している高等学部では、入学試験を実施し、厳しく合否を決定しているため、永住組の子女の多くが不合格となる。これに対して不満を抱く保護者が多く、毎年クレームが校長に殺到している。しかしながら、レベルを下げることで、今度は帰国組の生徒が他の進学塾に通うなど、帰国組の保護者の期待に応えられない状況になる。これは、「帰国する子女がスムーズに日本の学校教育に移行できることを目的」に設立された補習校の理念から大きく外れている。

本補習校では、過去に日本語力別や帰国組と永住組でクラス編成するなどいろいろと取り組み、結果的に失敗した経緯があり、現在の進学・進級基準を設けて一定のレベルで両方の子女に日本の教育を行っている。このような経緯の中、バランスが保たれているように見えるが、やはり学年が進むにつれてアメリカ生まれの児童の日本語力が弱くなるため、高等部への進学が難しくなる。

アメリカ生まれの児童の保護者の中には、補習校の高等部で学ぶ機会を与えるべきだと思っている方が多く、今後も2つの保護者のニーズに対応することは、難しいと思われるが、学校としては、小中学部で出来るだけ日本語力の向上を目指し高等学部へ繋げていく必要があると考える。

(4) 特別な支援を要する児童生徒について

LD（学習障害）やADHD（注意欠陥多動性障害）、アスペルガー（自閉症スペクトラム）等と思われる児童生徒が散見されるので、研修会等で理解を深め、保護者の理解へつなげる必要がある。（周囲の理解が大切で、識字障害、アスペルガーなどの子どももいる）

対応としては、教育カウンセラーの先生を月２回、１日２時間（10時～12時30分）来校してもらい、先生方や保護者からの相談を受けたり子どもの様子を見てもらったりしてアドバイスを受けている。

（資料）

〇進級・進学・卒業の制度について

（進級基準）本校の進級・進学・卒業においては、厳しい基準が設けられている。

①当該学年で使用している教科書を使って学習が可能な日本語力を有している者。

②各教科の出席率が80％以上の者。③すべての教科の宿題合格率が80％以上の者。

④通常の学習成績。意欲・態度が良好である。⑤学年末実力テストの成績が良好である。

⑥学校長が認めた者。

（進学基準）希望する学部の進学審査を経て、学校長が認めた者。

・中学部入学の進学審査は内申書と筆記試験で行う。

・高等学部入学試験は内申書と筆記試験と面接と小論文で行う。

３．シアトル日本語補習学校の改革と子どもたちから学んだこと

学校運営の取り組みでは、教職員や保護者の意見等に誠実に対応し、課題解決に向けて積極的に手立てを講じた。常に教育目標に基づいた計画立案・プログラムの実施に心がけ、カリキュラムの見直しや改善を行い、教員育成プログラムを構築し、新規教員の育成に努めた。さらに定期的な研修・直接対話を持って現地採用教員のレベルアップと教育目標への意識向上に尽力した。また、「安心・安全な学校運営」の下、セキュリティ体制や図書室の整備等、防犯・教育環境の充実にも努めた。これらの取り組みにより補習校へ貢献できた。

アメリカで暮らす子どもたちは、バイリンガルになるため現地校と補習校を両立し、自らがスケジュールの管理を行い、夢や希望を持って、日々、英語と日本語で授業を受ける努力をしている。この姿に日本の学校では、感じられないエネルギッシュな活動力・表現力・向上力を強く感じた。このエネルギッシュな力を日本の子どもたちにも伝え、世界中で活躍する国際人の育成に役立てていく所存である。